

【研究ノート・資料】

# 英語の受動態の習得に関する一考察

— 非対格動詞の文法性判断 —

○稲葉えいり<sup>1</sup>・稲葉みどり<sup>2</sup>

<sup>1</sup>愛知教育大学大学院教育学研究科修士課程・<sup>2</sup>愛知教育大学教育学部

## 要約

本研究では、日本語を母語とする英語学習者が英語の受動態を習得する際の問題や困難について考察する。英語学習者の受動態の習得における代表的な問題の1つとして、自動詞を受動化してしまう誤用が多く、先行研究から明らかになっている。中でも非対格動詞を受動化する誤用は、過剰受動化(overpassivization)と呼ばれ、日本人だけでなく、韓国語や中国語などの他の言語を母語とする英語学習者にも見られることが報告されている(Ju, 2000; Shin, 2011 他)。学習者の過剰受動化の原因には様々な学説がある。本研究では、はじめに受動態の習得に関する先行研究を概観し、受動態の習得について再検証すべき点を明らかにした。次に、日本の大学で英語を学ぶ大学生を対象に、実際に非対格動詞(自他交替のある; unaccusative verb)の受動化の誤用が見られるかどうかを、文法性判断タスクを用いて再検証した。その結果、被験者は、1) 非対格動詞の自動詞用法の能動文が正しい文であるにも関わらず、正しくないと判断する傾向があること、2) 非対格動詞の受動文(過剰受動文)が非文であるにも関わらず容認する傾向が見られることが明らかになった。これらの結果は、Yamakawa (1994)、Ju (2000)、Kondo (2005)の過剰受動化は起こるという主張に更なる証拠を付け加えた。今後の課題は、スピーキングやライティング等のタスクを用いて、実際に言語を発信した時のデータの分析をすることである。

## キーワード

英語教育、受動態、第二言語習得、文法性判断、過剰受動化

### 1. 目的と背景

本研究では、日本語を母語とする英語学習者が英語の受動態を習得する際の問題や困難について分析を行う。英語の受動態は、学習の困難度が高い文法構造の1つ<sup>1</sup>と考えられている(Hulstijn & de Graaff, 1994)。その要因として、受動態は言語構造が複雑で、産出には多くのプロセス(語順/動詞の活用/一致(人称・数)/時制・相/助動詞/動作主/視点等)が必要であり、第一言語習得においても、比較的遅くに習得される構造である(Kirby, 2010)ことが分かっている。

学習者の受動態の習得における代表的な問題の1つとして、自動詞を受動化してしまう誤用が多く、先行研究<sup>2</sup>から明らかになっている。自動詞は非能格動詞と非対格動詞に下位分類され<sup>3</sup>(Perlmutter, 1978)、中でも非対格動詞を学習者が誤って受動化することが多い。この誤用は、過剰受動化(overpassivization)と呼ばれ、日本人だけでなく、韓国語や中国語などの他の言語を母語とする英語学習者にも見られることが報告されている(Ju,

2000; Shin, 2011 他)。

学習者の過剰受動化の原因には様々な学説があり、1) 母語の負の転移の結果とする説(Hubbard and Hix, 1988)、2) 動詞の形容詞化のルールの過剰一般化とする説(Hubbard, 1994)、3) 使役動詞として使えない動詞を誤って使役動詞として使った結果であるとする説(Balcom, 1997)、4) 論理的な主語の欠落を補う規則の過剰一般化とする説(Zobl, 1989)、5) 名詞句移動の規則の明示的なマーカーとして受動態の規則を使った結果とする説(Oshita, 2000)などがある。

本研究では、まず、1) 先行研究を概観し、受動態の習得についてどのような研究結果や仮説が提示されているか考察する。次に、2) 筆者の実施した文法性判断タスクによる調査から、非対格動詞(自他交替のある; unaccusative verb)の能動文・受動文に関してその結果を分析し、その理解状況を明らかにする。特に、非対格動詞の自動詞用法の文を正しい文(適格文)と容認できるか、及び、非対格動詞の受動文(過剰受動文)を正しくな

い文（非文）であると判断できるかどうかには焦点を当てる。そして、3) 先行研究で示されている文法性判断タスクによる研究結果と比較し、類似点、相違点等を明らかにし、これらの学説を再検証する。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

本研究で焦点を当てている、英語学習者の過剰受動化についての研究は数多くある。中でも、以下で取り上げる先行研究は本研究で検証しようとする仮説と関連性があり、英語の過剰受動化の現象と、英語学習者の習熟度、母語（日本語、韓国語、スペイン語等）、文脈や背景との関係性を明らかにした研究である。

まず、Shin (2011) は、学習者の過剰受動化の間違いと英語の習熟度の関係性について研究した。学習者コーパスから習熟度ごとにエッセイのデータを集め、英語母語話者のライティングのデータと比較した。研究の対象となった動詞は‘happen’、‘occur’、‘appear’、‘die’の4つに限られ、それぞれの動詞ごとに間違いの数を集計した。また、4つの動詞の使われる頻度と過剰受動化の間違いの関係性についても検証された。

研究の結果、学習者の習熟度が上がるにつれ、非対格動詞の過剰受動化の間違いは減ること、また、動詞によって過剰受動化の間違いの割合が異なることが明らかになった。習熟度によって間違いが減る動詞もあれば、特定の習熟度レベルのグループでのみ多くの間違いが発見された動詞もあった。Shin (2011) で使用された自動詞（非対格動詞）は自他交替のない動詞に限られている。従って、本研究では自他交替のある動詞についても取り上げたいと考えている。

Kim (2007) は、非対格動詞を Sorace (2000) の分類4により4つのカテゴリーに分け、動詞のタイプ別に見た過剰受動化の間違いの割合について研究した。さらに、主語のタイプ (human, auto-movable object, non-auto-movable object) と過剰受動化の関係性についても調査した。韓国の英語専攻の大学生に対して文法性判断テストを実施し、間違いの数を集計し分析した。

研究の結果、動詞のタイプによって過剰受動化の間違いの割合に差があることがわかった。特に、移動動詞 (change of location verbs) と状態の存続動詞 (existence of state verbs) が学習者にとって習得困難であった。Sorace (2000) の非対格性の階層の順番通りではないため、この階層が影響するとは考えにくい、動詞のタイプによって過剰受動化の間違いの割合に差が現れることは証明された。

さらに、主語のタイプと過剰受動化の間違いの割合についても一定の関係性がみられた。主語が人 (human) の場合と、自動性 (auto-movable) または非自動性 (non-

auto-movable) の場合では、より動作主性が高いと思われる主語が人 (human) の文で過剰受動文を間違いだと判断した正当の数が多かった。Kim (2007) では、それぞれの種類につき2つの動詞が選ばれ、過剰受動化の現象について分析されたが、動詞の種類や動詞の数を増やした場合の結果についても検証する必要があると考える。

Ju (2000) は文中から認識されうる動作主 (‘conceptualizable agent’) と過剰受動化の関係性について研究した。Ju (2000) は、外発的文脈 (‘externally caused event’) がある場合は、内発的文脈 (‘internally caused event’) がある場合に比べ、過剰受動文を選びやすいという仮説を立てた。

そして、アメリカの大学に在学する中国人の大学院生を対象に、正しい文法を選択させるテストを行った。2文1セットで構成され、はじめの1文は外発的又は内発的文脈をもつ文、2つ目の文はターゲット文を提示した。

この研究では、非対格動詞のうち自他交替のある動詞とない動詞の双方の調査を行った。有生物主語は、動作主性を強め、学習者が適切な態を選ぶ鍵となると考えられる。この研究では文脈の影響について調査するため、有生物主語が原因となり態の選択に影響が出ないように、無生物主語のみをターゲット文に使った。また、態の選択の際に学習者が静的な意味での形容詞としての用法を選択しないために、‘immediately’や‘quickly’などの副詞を挿入することで形容詞の用法だと解釈される可能性を排除した。

これらの研究の結果、学習者は外発的文脈である場合に、内発的文脈である場合と比較して過剰受動文を選択しやすい傾向にあることが明らかになった。しかし、非対格動詞の自他交替の有無の間では正答率に有意な差が見られなかった。

Kondo (2005) は Ju (2000) の研究と同様の方法を用い、仮説を検証した。日本人とスペイン人の学習者に同様の文法を選択させるテストを実施した。Ju (2000) の研究に使われたターゲット文の非対格動詞の中には、他動詞用法か自動詞用法かが曖昧なものがあり、この曖昧性を回避するために、自他交替のある動詞を含むターゲット文に *by itself* などの語句を挿入した。

その結果、Ju (2000) での外発的文脈が学習者の過剰受動化に影響を与えているという仮説は否定された。Kondo (2005) は、Ju (2000) で非対格動詞の過剰受動化と他動詞の受動化が混同する可能性を *by itself* などの語句の挿入により回避した結果だと主張している。

また、非対格動詞の自他交替の有無の間では、Ju (2000) と同様、正答率に有意な差は見られなかった。Ju (2000) と Kondo (2005) で論じられた、自他交替のある自動詞とない自動詞での過剰受動化の頻度の差につ

いては本研究でも再検証してみたいと考えている。

Yamakawa (1994) は日本の県立高校と国立広島大学の英語学習者に、(1) 統語的には受動態を用いないが対応する英文では受動態を用いる和文、(2) 受動態以外の態を使う和文、(3) 間接受動態と使役の和文を英訳させ、学習者の受動文の産出の特徴について分析した。

(1) の和文は、日本語の受動態形態素である「られ」が含まれないため、受動態文に英訳することが難しかったと分析している。(2) の和文は、可能態、自発態、敬語表現を含んでいる。学習者の中には、自発態や敬語表現を含む和文の英訳に **be+過去分詞** の形式を用いた者がいた。また、可能態を含む和文を英訳で受動文にする場合に、能動文として産出した学習者もいた。(3) の和文は、直接受動態と間接受動態を含んでいる。間接受動態は英語に対応する文構造がないため英訳すると非文となる。従って、学習者の英訳の状況から母語の転移の可能性を見いだすことができる。

研究の結果、学習者の約30%が日本語の間接受動態の転移とみられる誤文を産出したことがわかった。Yamakawa (1994) は、これらの結果から、学習者が動作主と被動作主の関係性を正しく認知できていないと分析している。(3) の間接受動態について、学習者にとって英訳をすることは難しいが、日本語の間接受動文の英訳された文(非文)を容認する割合は比較的高いと考える。従って、本研究では、将来的には間接受動文の容認度を検証したいと考えている。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 被験者

調査に協力してもらったのは、愛知教育大学の学部2～4年生の日本人学生50名(2018年7月現在)である。高校までの英語教育を一通り終えている学習者と考えた。3名の英語母語話者にも調査文のネイティブ・チェックにおいて協力を得た。本研究では、3名の回答が一致したものを調査文としている。

#### 3.2 調査内容(文法性判断タスク)

高等学校までの英語教育を受けた日本人の学習者が、英語の受動態についてどの程度の知識を有しているかを調査するため、文法性判断タスクを作成した。受動文を種類別に分け、対応する能動態の文も調査に含めた。

調査文はすべて1文である。語彙は高校までに出てくる平易なものを目安にした。自他交替のある非対格動詞を使う場合には、自動詞用法であること分かるように、文中に自発的な動きを示唆する副詞を挿入した。

文法性判断タスクでは、正しくは能動文で表す文を受動態にした文(過剰受動文)、正しくは受動文で表す文を

能動文(過少受動文)にした文を提示し、誤りと判断できるかどうかを調査した。併せて、正しい文も提示した。また、他動詞の能動文・受動文は学習者が英語の態(Voice)の基礎知識をどの程度習得しているかを把握するために調査文に挿入した。調査文は錯乱文と混ぜ、不規則な順序に配列した。他動詞を含む文は目的語を必要とするため能動態・受動態ともに正しい文ができる一方、自動詞は目的語を取らないため、英語の受動文は基本的には非文となる。

回答は、「1. 正しいと思う」、「2. 正しくないと思う」、「3. わからない」の3択から1つ選択する形式である。

本研究では、調査の中から、非対格動詞(自他交替のある; unaccusative verb)の能動文・受動文の分析の結果を考察することにする。

以下の例文(A)は、自他交替のある動詞‘open’の他動詞用法の能動文で、正しい文(適格文)である。(B)は、自動詞用法の能動文で、正しい文(適格文)である。

(C)は、自動詞用法の受動文(過剰受動文)で、非文である。ここでは、(C)を非文と判断できるかどうか、研究の焦点となる。本研究で用いた調査文は、第4章「結果と考察」に提示した。

- (A) John opened the door. (他動詞用法・適格文)
- (B) The door opened immediately. (自動詞用法・適格文)
- (C) \*The door was opened automatically. (過剰受動文・非文)

#### 3.3 データ処理

収集したデータから、各文に対する学習者(集団)の正答率、容認度(「正しいと思う」と回答)、否認度(「正しくないと思う」と回答)、「分からない」の回答数を集計した。文法性判断タスクの途中で回答をやめた者、また、連続して10問以上同じ番号にチェックを入れた者の回答は、研究結果の妥当性を確立するために排除することとした。50件のうち、有効回答数は、50件である。

### 4. 結果と考察

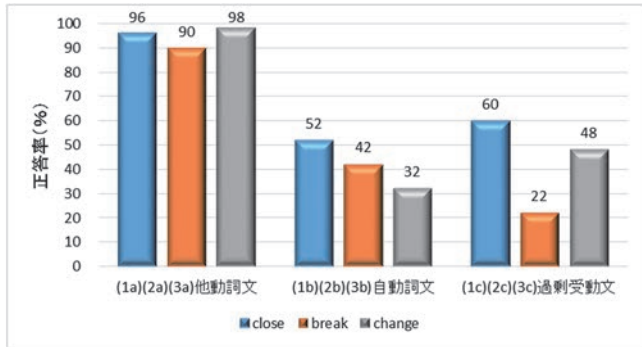
#### 4.1 非対格動詞の能動文(自動詞文)の正答率

自他交替のある動詞の他動詞文と自動詞文、受動文の文法性判断タスクの結果をみる。【表-1】に示した調査文(1a)、(2a)、(3a)は、自他交替のある動詞‘close’、‘break’、‘change’を他動詞として用いた「他動詞文」(適格文)である。(1b)、(2b)、(3b)は、自動詞として用いた「自動詞文」(適格文)である。(1c)、(2c)、(3c)は、過剰受動文(非文)である。

【表-1】非対格動詞（自他交替あり）の調査文

他動詞用法 (a)・自動詞用法 (b)・過剰受動文 (c)
(1a) He closed the door.
(2a) He broke the wineglass.
(3a) He changed his address.
(1b) The door closed immediately
(2b) The wineglass broke easily.
(3b) His address changed.
(1c) *The flower is closed around the sunset.
(2c) *The old chair was broken year by year.
(3c) *The weather in London is often changed.

【図-1】は、これらの文に対する被験者の文法性判断の正答率 (%) のグラフである。正しい文を「1. 正しいと思う」と回答した場合、及び、正しくない文を「2. 正しくないと思う」と回答した場合を正答とする。



【図-1】他動詞文・自動詞文・過剰受動文の正答率

結果をみると、他動詞文は、(1a)、(2a)、(3a)の全てにおいて正答率が非常に高い。よって、他動詞文は「適格文 (正しい文)」と判断できることが分かる。

一方、自動詞文の正答率は他動詞文と比べると3文共に低い。正答率は、5割程度、または、それ以下である。よって、自動詞文については、適格文であると判断できない割合が高く、理解度が低い。

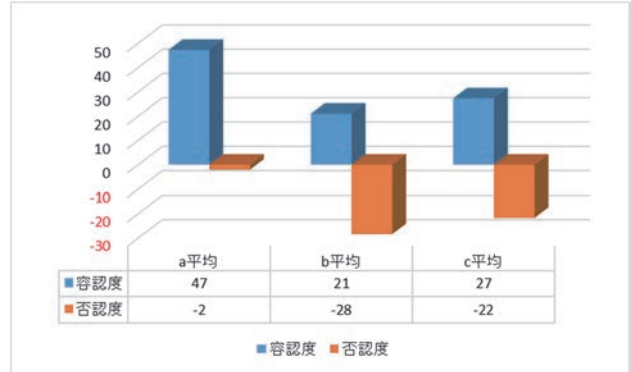
過剰受動文の正答率も、他動詞文と比べると全体に低い。ここでは、最大値が60%、最小値が22%で、動詞により高低の差がある点が着目される。

#### 4.2 他動詞文・自動詞文・過剰受動文の容認度 (平均)

次に、他動詞用法 (a)、自動詞用法 (b)、過剰受動文 (c)の結果について、容認度の観点から考察する。以下の分析では、被験者1人が「1. 正しいと思う」と回答した場合+1点を与える。また、「2. 正しくないと思う」と回答した場合-1点を与える。有効回答数が50であるため、全ての回答者が「1. 正しいと思う」と回答した場合、

容認度50となる。反対に、全ての回答者が「2. 正しくないと思う」と回答した場合、否認度-50となる。「3. 分からない」及び、空欄 (未回答) は0点として計算する。

【図-2】は、他動詞文 (a)、自動詞文 (b)、過剰受動文 (c)の3つ文の容認度・否認度の平均のグラフである。



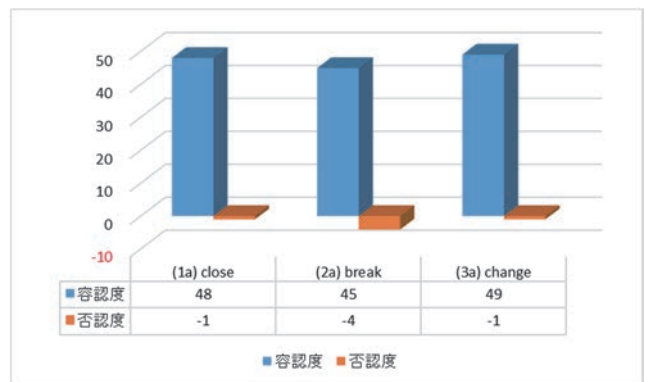
【図-2】他動詞文・自動詞文・過剰受動文の容認度平均

他動詞文の容認度は47で、9割以上が正しい文として容認している。次に、自動詞文は、容認度が21で、半以下である。否認度は-28で、容認度より幾分高い。自動詞文は適格文であるが、被験者の半数以上が正しくない文として否認していることになる。一方、過剰受動文について、容認度が27で、本来は非文であるにもかかわらず過半数の被験者が正しい文として容認している。

以上から、平均値でみる限り、他動詞文は正しく理解されているが、自動詞文を正しいと判断するのが難しいことが分かる。さらに、過剰受動文を正しくない (非文) と判断することが難しい傾向が見られることも分かる。よって、自動詞文の理解度が低いことが示唆される。

#### 4.3 他動詞文の容認度 (動詞別)

動詞別の容認度をみる。まず、最初は他動詞文について考察する。【図-3】は、3つの動詞 ('close', 'break', 'change') の他動詞文の容認度・否認度のグラフである。



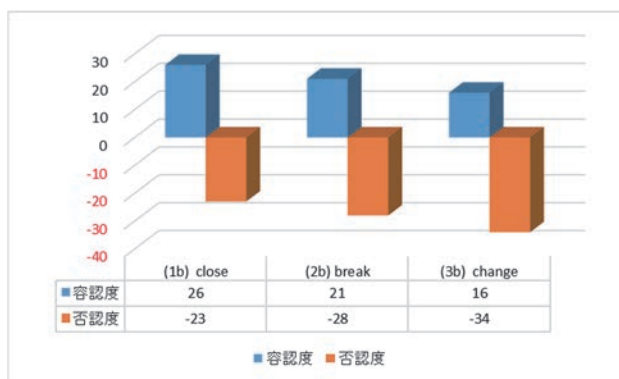
【図-3】非対格動詞の他動詞文の容認度

(1a) 'close'、(2a) 'break'、(3a) 'change'の3つの動詞を用いた他動詞文は、すべて適格文で、被験者の9割以上が正しい文として容認している。このことから、これらすべての動詞の他動詞用法について、文法性をある程度正しく判断できると考えられる。

#### 4.4 自動詞文の容認度 (動詞別)

ここでは、自動詞文の動詞別の容認度について考察する。【図-4】は、自動詞文の3つの動詞('close'、'break'、'change')の容認度・否認度のグラフである。ここで取り上げた自動詞文は、すべて正しい文である。しかし、容認度は(1b) 'close'においては26で、3つの中で一番高い。

(2b) 'break'では、容認度が21、否認度が-28で、否認度の方が高い。(3b) 'change'は、容認度が16で、さらに低く、否認度が-34である。よって、語彙により幾分差があるが、どの動詞文について調査文と判断することが難しかったと言える。



【図-4】非対格動詞の自動詞文の容認度

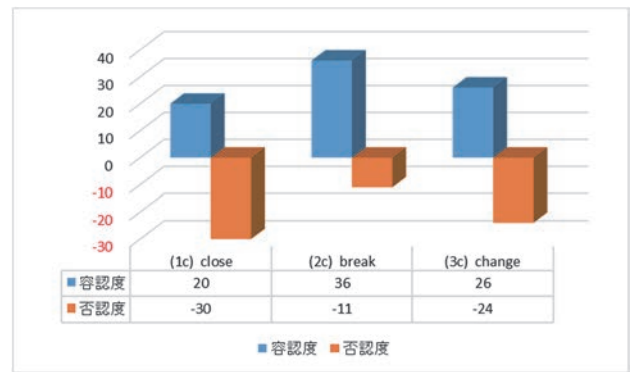
#### 4.5 過剰受動文の容認度 (動詞別)

最後に過剰受動文の動詞別の容認度について考察する。

【図-5】は、過剰受動文の3つの動詞('close'、'break'、'change')の容認度・否認度のグラフである。ここで取り上げた過剰受動文は、すべて非文である。したがって、すべて否認することができるかどうかに着目する。

(1c) 'close'を見ると、否認度は、-30で、3つの中で一番高い。(2c) 'break'は、否認度が-11で一番低い。

(3c) 'change'も、否認度が-24で、5割以下である。よって、動詞によって、否認度は異なるが、最高でも6割程度で、過剰受動文を否認できず、容認する傾向が見られる。特に、(2c) 'break'は、容認度が36と高いことから、適格文と判断する傾向が見られ、否認することが難しかったと思われる。以上の結果から、非対格動詞の過剰受動化の現象は比較的起こりやすいと考えられる。



【図-5】非対格動詞の過剰受動文の容認度

### 5. まとめとディスカッション

本研究で取り上げた調査文の文法性判断タスクの分析の結果から、被験者は、1) 他動詞文の能動態は、容認度が高く、適格文であると正しく判断できること、2) 自動詞文は、適格文であるにも関わらず、否認度が高く、非文と判断する傾向が見られること、3) 過剰受動文は、非文であるにもかかわらず、容認する傾向にあることが分かった。これらの結果は、Yamakawa (1994)、Ju (2000)、Kondo (2005)の過剰受動化は起こるという主張に更なる証拠を付け加えた。

本研究で調査に用いた動詞は、必ずしも先行研究と同じではなく、数も限られている。紙面の制約から、3つの動詞を含む調査文のみの結果を示した。よって、予備的な結果であり、他の動詞を含む調査文についても、結果の分析をする必要がある。

### 6. 今後の課題

本研究の究極の目的は、英語の受動態を習得する際の問題点や困難を明らかにし、その要因を解明することである。それには、受動文を理解する場合の問題点(文法性判断等)、文を産出する際の困難点(誤用・非用等)、文を運用する際の特徴(過剰使用・回避等)等、多面的に考察を進める必要がある。

本研究では、調査の一部である非対格動詞の能動文、受動文の理解の側面を扱ったが、その要因を特定するには、英語の習熟度との相関、他の調査項目との相関などの統計的な分析も必要である。また、文法性判断タスクのみでなく、スピーキングやライティング等のタスクを用いて、実際に言語を発信した時のデータにも着目した分析・考察が必要であり、それを今後の課題としたい。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたっては、教員、学生の皆様に調査にご協力いただきました。査読者の方からは有益なご

意見、ご助言を賜りました。この場を借りて、感謝の意を表します。

## 注

- <sup>1</sup> 一方、最も簡単 (simple/easy)なのは、過去進行形で、形式と機能のマッピングの透明性が高く、生起頻度も高く、形態的に自由形態素 was/were と1音節から構成される束縛形態素 *-ing* で認識され、形式上際立ちも高いからであると考えられている (Collin et al., 2009)。
- <sup>2</sup> 第2章参照。
- <sup>3</sup> Perlmutter (1978) は非能格動詞の主語は外項に生起する一方で、非対格動詞の主語は内項に生起し派生の最終形態で外項の位置に現れるとした。自動詞の一類型である非対格動詞には、他動詞用法のある動詞 (e.g. open, close, break) と自動詞用法のみの動詞 (e.g. happen, occur, appear) がある。本研究では、自他交替のある動詞を取り上げ、自動詞用法と他動詞用法の双方を用いた例文を文法正判断タスクに挿入した。
- <sup>4</sup> Sorace (2000) は非対格動詞を非対格性の強さから4つの下位分類に分けた。非対格性の強さの順番は Change of Location Verbs, Change of State Verbs, Continuation of a Pre-existing Verbs, Existence of State Verbs である。非対格性の強さの度合いは、動詞が持つ動作主性 (agentivity) と完了性 (telicity) の度合いによって決まるとしている。

## 参考文献

- Balcom, P. (1997) . Why is this happened? Passive morphology and unaccusativity. *Second Language Research*, 13 (1) , 1-9.
- Hulstijn, J. H., & de Graaff, R. (1994) . Under what conditions does explicit knowledge of a second language facilitate the acquisition of implicit knowledge? A research proposal. *AILA Review*, 11, 97-112.
- Hubbard, P. L. (1994) . Non-transformational theories of grammar: Implications for language teaching. In T. Odlin (Ed.) , *Perspectives on pedagogical grammar* (pp. 49-71) . New York: Cambridge University Press.
- Hubbard, P. L., & Hix, D. (1988) . Where vocabulary meets grammar: verb subategorization errors in

- ESL writers. *CATESOL Journal*, 89-100.
- Ju, M. -K. (2000) . Overpassivization errors by second language learners: The effect of conceptualizable agents in discourse. *Studies in Second Language Acquisition* 22, 85-111.
- Kim, J. T. (2007) . Semantic aspects in L2 English overpassivization. *The Linguistic Association of Korea Journal*, 15 (4) , 55-76
- Kirby, S. (2010) . Passives in first language acquisition: What causes the delay? *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 16, 109-117.
- Kondo, T. (2005) . Overpassivization in second language acquisition. *IRAL*, 43, 129-161.
- Oshita, H. (2000) . What is happened may not be what appears to be happening: a corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English. *Second Language Research*, 16 (4) , 293-324.
- Perlmutter, D. M. (1978) . Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38, 157-189.
- Shin, J.-A. (2011) . Overpassivization errors in Korean college students' English writings. *Korean Journal of Applied Linguistics* 27 (3) , 255-273.
- Sorace, A. (2000) . Gradients in auxiliary selection with intransitive verbs. *Language*, 76, 859-890.
- Yamakawa, K. (1994) . Error analysis of passive sentences written by Japanese learners of English: With reference to native language transfer. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)* 5, 101-110.
- Zobl, H. (1989) . Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In Gass, S. M. & Shachter, J. *Linguistic perspectives on second language acquisition*. New York: Cambridge University Press (pp. 203-221) .

【連絡先 稲葉 えいり  
s217m042@aecc.aichi-edu.ac.jp】

【連絡先 稲葉 みどり  
mdinaba@aecc.aichi-edu.ac.jp】

## **Analyses of JLEs' Passive Errors: Focusing on the Sentences with Unaccusative Verbs**

Eiri INABA<sup>1</sup> and Midori INABA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>*Master Course in Graduate School of Aichi University of Education*

<sup>2</sup>*Faculty of Education, Aichi University of Education*

### **ABSTRACT**

The present study investigated the acquisition of English passive voice by native speakers of Japanese learning English as a second language. (hereafter, JLEs: Japanese learners of English). It focuses on the learners' overpassivization errors. These errors are caused by passivizing a kind of intransitive verb known as an 'unaccusative verb' (Perlmutter, 1978) and result in incorrectly produced sentences.

The previous studies, such as Yamakawa (1994), showed that the English learners often make overpassivizing errors. Shin (2011) revealed that errors of overpassivization can be remedied as English learners' proficiency levels increase. Ju (2000) and Kondo (2005) investigated whether the conceptualizable agent affects learners' cognition when they choose voice in a sentence. Yamakawa (1994), by analyzing production data of translated sentences from Japanese to English, discovered that some JLEs might not accurately understand the agent-patient relationship.

To examine these findings and confirm their claim, the researchers conducted a grammaticality judgment task including three types of sentences: Type A) active voice sentences with transitive verbs (correct sentences), Type B) active voice sentences with intransitive (unaccusative) verbs (correct sentences), and Type C) passive voice sentences with intransitive (unaccusative) verbs (overpassivized and incorrect sentences). The subjects are 50 JLEs at a university in Japan. The central issue here is whether JLEs accept or reject the overpassivized unaccusative sentences.

The results of the study indicate that the JLEs accept Type A, but they tend to reject Type B even though those sentences are correct, and they tend to accept Type C, overpassivized sentences, even though those are incorrect. The results added further evidence to the research by Yamakawa (1994) that JLEs tend to make overpassivization errors of particular verbs and contexts, and support the claim by Ju (2000) and Kondo (2005) that learners' overpassivization errors do occur in the sentences with intransitive (unaccusative) verbs.

However, the number of verbs (sentences) analyzed in the present study is small and limited. It focused on the three verbs (sentences including the verbs) in each verb category. Since the grammaticality judgment task administered in the present study includes more verbs (sentences), further analyses are needed to investigate the factors causing overpassivization errors by JLEs.

### **Keywords**

Passive, Overpassivization, Unaccusative Verbs, Voice, English, Language Learners